



おいしさの追求と農作業の省力化を両立するお米作り



北海道指導農業士 (株)佐藤農場 代表取締役 佐藤 忠美氏 (妹背牛町)

省力化を進めて 持続可能な米作りを目指す

見渡す限り黄金色の田んぼが広がる妹背牛町は、面積の70%以上が農地。石狩川と雨竜川の恵みを受け、米作りに適した平坦で肥沃な大地が続きます。この地で稲作農家2代目の佐藤さんは、30年ほど前から直播栽培に取り組み、現在は、33ヘクタールある水田のうち、3分の1ほどを直播で栽培しています。

一般的な稲作では、雪の残る3月から除雪を行い、ビニールハウスで苗を育てて田植えを行うまで延べ日数にして70日ほどを費やします。小麦や大豆など輪作体系の作物も雪解けから一斉に作業がスタートするため、春先の限られた期間に人手を要する作業が重なります。

直播栽培では、水に浸けた種籾をそのまま田んぼに播くため、苗を育てたり田植えをする作業分が大幅に省力化されます。「特別豪雪地帯で農業人口の減少している妹背牛町では、春先の作業効率を高めるために直播栽培を取り入れることが効果的」と考えた佐藤さんは、国内外の視察を経ながら、直播に取り組んできました。



奥様の聖子さんもコンバイン運転歴は30年以上。稲刈りも夫婦の息はピッタリ

みんなで栽培技術を高め 研究会で情報を共有する

北海道農業にも大きな影響を与える少子高齢化。離農する農家の畑は集約化され、労働力が限られる中、一戸当たりの栽培面積は拡大していく傾向にあります。家族経営でも大規模化に対応した直播栽培の技術を確立して、地域の仲間にも広めたいと考えた佐藤さんは、平成6年に「妹背牛町水稲直播研究会」を立ち上げ、栽培データの収集や技術の構築、農業機械の共同利用などを進めました。

積雪寒冷な北海道では、育苗して田植えをする稲作が歴史もありスタンダード。資材や技術も確立され収量も安定しています。一方、直播栽培は、土作りから種播き、水や肥料の管理など、環境によって左右される要素が大きく、作りによって収量にも差が出ます。研究会では、この課題を克服するため、偶然や失敗すらもデータ化して技術に変えてきました。

た。発足から27年余りで会員数は50人を超えました。「誰かひとりが成功するのではなく、みんなで成功する」

「特A」の常連となりました。品種開発を行う研究者や、品種特性を保つために厳格な栽培管理を行う採種農家、さまざまな工夫を重ねて生産を行う稲作農家、さらには、生産されたお米の鮮度を保ち、消費者へ届ける流通に携わる企業の努力など、多くの人たちのリレーの積み重ねが北海道米ブランドを支えています。

直播用新品種の「えみまる」。イベントの食味コンテストでも評判は上々とのこと

て、みんなが良くなるのが大切。何か面白そうだなって、周りのやってくる「えみまる」のいいところを聞いています。と佐藤さん。

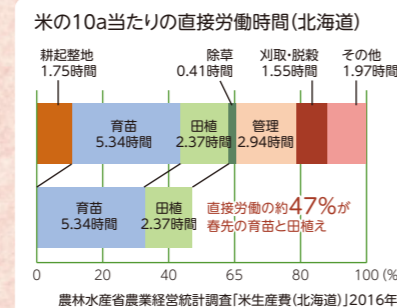
おいしい北海道米を届けたい 夢は直播栽培で「特A」

今年から一般栽培が始まった「えみまる」は佐藤さんにとって5品種目の直播栽培用米。多くの人の努力で少



この20年ほどで北海道米は目覚ましい進化を遂げ、食味ランキングで

「栽培技術が発展し、30年先、50年先にもっと北海道で直播栽培が増えているかもしれない。さらに良い品種が開発されて『特A』にもなってくれたら」と、今後の夢を語る佐藤さん。直播以外にも省力化できる技術があれ



Q なぜ直播栽培をするの?
A 北海道のお米作りの課題を解決するひとつの方法です。

お米作りの労働時間の約47%が、育苗と田植えといわれています。少子高齢化で農業者が減る中、育苗と田植えの作業を省くことができる直播栽培を行うことで、生産者の負担を減らし、一戸当たりの栽培面積が拡大しても、田んぼの面積を保つことができます。

